

ボードガヤー出土漢文石刻史料の意義と

10-11 世紀における中国仏教美術の動向

稲本泰生

10 世紀後半から 11 世紀にかけて、中国とインドの間では僧侶の頻繁な往来があった。この時代に属する 6 点の漢文石刻資料が釈迦成道の地ボードガヤーで出土しており（うち 4 点は現在、コルカタ・インド博物館蔵）、インドにおける中国人僧の活動状況について、貴重な情報を与えてくれる。例えば 1033 年銘の碑は、僧・懷問の三度目の訪天時に、北宋第 4 代仁宗と莊獻皇太后を願主とする造塔を、現地で代行した際に立てられた。このとき開封の伝法院が、ボードガヤーの本尊釈迦像に奉獻すべく、袈裟や「五百羅漢を表した幡」を用意したことが中国側の史料からわかる。

この幡の奉獻は、天台山に化現すると信じられ、多数の造像が行われた「生身の五百羅漢」の存在を前提としており、その「中国における実在性」を彼地で示す意図が垣間見える。10～11 世紀は、五台山の文殊菩薩や峨眉山の普賢菩薩など、中国の聖山に現れるとされ、かつ生身性を謳われる尊格の造形が、大きく展開した時代である。生身性にまつわる造形の問題は、985 年に奄然が将来した、三国伝来と称する京都・清凉寺本尊釈迦如来像における、五臓納入の意義などもつながっている。

一方で北宋は中国史上最後の大規模な仏典翻訳事業が行われた時代であり、伝法院はその中心地である。10～11 世紀の中国仏教美術には、取経僧（「唐僧西天取経」）の図像など、「空間（インド～中国）・時間（過去・現在・未来）の両面における仏法の相承」を主題とする作例が少なからずある。宋室の代参という性格を併せもつ 1033 年の造塔・立碑の背景にも、仏法の東伝に対する意識が潜在している。

今回の報告では、以上のような関心に沿って石刻資料を紹介し、ボードガヤーの場所及び文物と、当時の中国仏教美術の関係について、平安・鎌倉時代における日本の状況も視野に入れつつ考えてみたい。